

夏期講習だより

第5号

文責 研修委員 小島 汐織 (中川西小学校)

7月9日(木) 第4回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第4回読み合わせ 令和8年7月9日(木)

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部「善の研究」
「第三編 善」(第四章 価値的研究)(第九章 善(活動説))

司会者: 佐藤 重浩先生(赤穂南小学校) レポーター: 大久保 太郎先生(赤穂中学校)

【大久保 太郎先生レポートから】

1. 「価値」の研究の前提。

・「原因」と「目的」による説明の対比

全ての現象は「原因によって説明する立場」と「目的によって説明する立場」から考察できる。無機界には原因はあっても目的はないが、生物学的な生存法則をそのまま「価値の判断基準」にすることには限界がある。例えば、物理的な原因を突き止めるだけでは、「なぜその花が美しいのか」という価値を決めることはできないからである。

・価値の本質としての「欲望を方向づける力」

価値とは単なる客観的事実ではなく、「人心に対して最も有力なもの」であり「最も我々の欲望を動かすもの」として働く。先生は、心理学者がいう「生活力を増進するもの」としての快楽を超え、人間の意識や欲求を方向づける力そのものを価値の本源として捉えている。

・「意志」の構造と「善」の定義

人間の「意志」を「先天的欲求(衝動や本能)」と「意識された目的観念」が統一されたものと定義する。この意志の発展が完成し、我々の内面的欲求(理想)が実現されることこそが、賞賛に値する「善」の極致であると述べている。

2. 教育現場における省察

・教師による価値の決定という疑問

先生はこれまで「人の役に立つもの」や「多くの人が求めるもの」に価値があると考えてきた。しかし、それは教師である自分が判断して教材や活動を選んでいるだけであり、「教師が価値を決定してしまっているのではないか」という強い疑問を抱くに至っている。

・意志の実現」と「学びの質」の乖離

例えば、生徒の「おしゃべりしたい」という先天的欲求をただ実現させるだけでは、「活動は盛り上がるが、学びが深まらない授業」になってしまう恐れがある。大久保先生は、生徒のやりたいことを単にかなえることが「善い授業」になるとは限らないと、西田の考えを自身の授業づくりに照らして慎重に分析した。

3. 善の授業とは

・探究的な学びにおける価値の創出

「自分で課題を見つけ、自分の意志で探究を進める学習」は、西田のいう価値と深く関わっている。先生は、生徒一人ひとりが主体的に取り組む姿勢の中にこそ、真の教育的価値が生まれることを見出している。

・支援者としての教師の働きかけ

大久保先生にとっての「善」の授業とは、全員の願いを同時にかなえることではない。生徒自身が「自分は何をしたいのか」「何を学びたいのか」という自分の価値や意志に自ら気付けるよう働きかけることこそが、これからの教師に求められる役割であるとしている。生徒が自らの意志を大切にしながら、それを「よりよい学びへとつなげていける授業」を目指すべきであると考えた。

【グループ討議まとめ】

〈A グループ〉

- ・善悪の判断が普段の感覚から離れている。ごみを拾うのが一般的な善であるが、拾わないことは一般的には悪とされるが「手が汚れないため」とごみを拾わないことは、「手を汚さない」という理想を実現しているということになり、善ということになるのではないかという話があがった。
- ・先生に「お金の勉強は将来役に立つ」と言われて、自分のためになるから算数のお金の勉強を頑張るとするのは善といえるのか。大人になってから実は必要な勉強だったと思うこともたくさんあるが、それは自分の内側にあるものなのではないか、など何が善で何が善でないのかという話になった。

〈B グループ〉

- ・「善の授業とは」という話をした。子どもの気持ちを大切にしたい授業、「わからない」が「わかる」になる授業などがある。
- ・子供の気持ちを受け入れる授業は、子どもの潜在的欲求や意志の実現の結びついていないのではないかと考えた。子どもの潜在的欲求を見取るのは難しいが、それこそが主体的な授業につながるのではないかと考えた。

〈C グループ〉

- ・善と幸福について深めて話した。幸福であれば善というわけではないが、善であれば幸福であるという考えがある。善には命令的威厳の性質ももっていて、正されていくような形で善につながることもある。
- ・「おしゃべりしたい」となってしまう時点でどうなのか。環境や教師の言葉で「やりたい」「学びたい」という思いが出てきたらそれもまた幸福につながるのではないかと考えた。そして幸福である前に善でもあるという状態にもっていくことも可能ではないかと考えた。西田の言っているように、自然的な発生が一番であるが、できなかったときに私たち教員にできるのはそういうことではないかという話をした。

〈D グループ〉

- ・教室のテレビでワールドカップを勝手に見ていた子ども。目をきらきらさせながら、「すごいな」「こんな風になりたいな」と言っていた。これは純粋経験のようなものではないかと考えた。
- ・授業も同じで、材にであった子の「こうしたい」を叶える、できるように授業していかななくてはならない。子どもにとっても○で、教師にとっても○になる授業が理想だという考えがまとめられた。

〈E グループ〉

- ・4回目だが一番難しかった。善の授業とは何なのかということ話を話した。何を学びたいのか、何をしたいのか、それに近づける働きかけができた方がいいが、その自分の中の理想に気づくことは難しい。
- ・自分の中でやりたいことは、日々いろいろな経験をもとに更新していくこと、それを感じ取りながらやっていきたいが、やはり善の授業とは何なのか難しい。

【唐沢正吉先生ご指導】

- ・純粋経験は説明できない。体得する、つまり腑に落ちる経験でしか実感できない。純粋経験に近いことを経験すると「～したい」が生まれる。やりたいことをそのままするのは難しい。
- ・西田の「活動説」における先天的欲求とは、子どもが潜在的に持つ「育ちの芽（本来無限に伸びようとする可能性）」である。この可能性を信じ、抑圧することなく円満に発展させていくことが教育の根幹である。
- ・個々の欲求や目標が衝突する葛藤、不統一の場において、教師と子ども、あるいは子ども同士が気持ちを1つにする統一を純粋経験の形で実現することを模索していく。いろいろな子どもたちがいるが、3通りの子どもたちの反応を考えておく。予想できない子どもにどう反応するのか、どう向き合っていくのか、どう位置付けていくのかが教師の自己実現のために大切である。
- ・サッカーのワールドカップのように、個々が主体的な自由を発揮しながらも、全体として調和し機能する姿が理想であり、教師は先生としての自我を捨てて、その関係を見つめなおす必要がある。
- ・既存の常識が通用しないような問いや体験（純粋経験の場）を教材研究により設定し、子どもの探究心を揺さぶる。事前の指導案にとらわれず、授業中の「予想を超える子どもの反応」に対して、全力で向き合う瞬間にこそ、教師としての自己実現と醍醐味がある。
- ・教師が周到に準備しつつも、子ども自身に「自分たちが決めて探究した」と実感させる授業づくり（例：高島小白紙単元の実践など）が最上の教育である。
- ・内的欲求と外的欲求は裏腹であり、内的欲求のみをとりあげていくことは、現実的に不可能である。規則や課題などの外的欲求を、子ども自身の主体的な願いである内的欲求へと変換させる仕掛けやその場を提供することが重要である。
- ・「どんな子どもでも潜在的に伸びたがっている」という育ちの可能性を信じ、温かいまなざしで見守り続けることこそが、教師の自己実現につながるのである。